様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００８４６

研究課題名（和文）雇用現場で求められる実用的英語スピーキング能力とは何か？：探索的研究

研究課題名（英文）What speaking proficiency is presupposed in the workplace? an exploratory research

研究代表者
鍋井　理沙（NABEI, LISA）

東海大学・情報通信学部・准教授

研究者番号：００７５９１９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：添付資料の４．「研究の方法」で収集されたデータの分析結果は、2023年3月のシンガポールで実施された57th RELC INTERNATIONAL CONFERENCE（国際学会）で「The effect of accented English of Japanese university students on employment decisions」として発表した（早稲田大学法学学術院・原田康成教授との共同発表）。コロナの影響で実験に遅れが生じ、分析が実施できなかった分もあったため、分析は進行中でこのデータに関する論文は現在執筆中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は企業が日本の大学生に対して卒業時にどのような英語スピーキング能力を身に着けていることを期待しているのかを通じて学生の英語力についてのemployabilityを調査した。研究手法としてこれまでemployabilityが研究されてきたビジネス・ジャーナルで採られてきた方法ではなく第二言語習得の音声・心理言語学の研究でcomprehensibilityが測定されてきた方法を踏襲し外国語教育の分野で使われているスピーキング能力の測定指標とemployabilityを比較することでビジネス英語のニーズと外国語教育の研究で得られた知見を融合し新たな視点から大学の英語教育に貢献したものと考える。

研究成果の概要（英文）：The results of the analysis of the data collected in Appendix 4, "Research Methods", were presented at the 57th RELC INTERNATIONAL CONFERENCE held in Singapore in March 2023 as "The effect of accented English of Japanese The results were presented as 'The effect of accented English of Japanese university students on employment decisions" at the 57th RELC INTERNATIONAL CONFERENCE in Singapore in March 2023 (joint presentation with Professor Yasunari Harada, Waseda University School of Law). The analysis is ongoing and a paper on this data is currently being written, as there were delays in the experiment due to the pandemic and some of the analysis could not be carried out.

研究分野：第二言語習得

キーワード：employability　comprehensibility　accentedness

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

グローバル化でビジネスにおける英語の必要性がこれまで以上に高まっているものの、企業は新卒の大学生に対して雇用されるために必要な英語力を明確には提示していない。一方、教員になる前に 10 年ほど金融機関に勤務し、業務で英語を使用していた経験がある身として、業務で英語を使用している個々のビジネスパーソンが、新入社員に漠然と一定レベルの英語スピーキング能力を求めていることを筆者は感じてきた。この「漠然」とした要望を明確にし、大学の英語教育の現場にフィードバックしたいと考えたことが本研究の契機である。外国語教育では、国際化が進み非英語母語話者が急速に増え始めた 1990 年代頃から母語訛りのある英語が聞き手にどのように理解されているのか、聞き手に発話の comprehensibility、intelligibility（理解度）、accentedness を測定してもらい、各変数間の関係を探索する研究が多く実施された (Anderson-Hsieh, 1992; Munro & Derwing, 1995; Piske, et al., 2001)。こうした研究では母語訛りがあることは必ずしも comprehensibility を下げる要因ではなく、他の要因（語彙の豊かさ・文法の正確さ・話す速度等）も大きな影響を与えることが示唆されている（Isaacs & Trofimovich, 2012; Saito, et al., 2015）。一方、ビジネスの分野でも 1980 年代頃から、非英語母語話者の発話の credibility（信頼性）や employability を測る研究が進められてきた。多くの実験で comprehensibility や employability を下げる大きな要因として accentedness の強さが挙げられており、第二言語習得の研究と異なる結果が出ている。筆者はこの相違点を調査・分析しビジネスで求められている英語スピーキング能力を、第二言語習得の研究方法で分析し、外国語教育の現場にフィードバックすることを目的として本研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、企業が日本の大学生に対して卒業時にどのような英語スピーキング能力を身に着けていることを期待しているのかを通じて、学生の英語力についての employability（雇用可能性・雇用されやすさ）を調査することである。第二言語習得の研究では、外国語学習者の発話を comprehensibility（理解しやすさ）や accentedness（母語訛りの度合い）の観点から測定し分析した知見が積みあがっているが、実際に社会で職務に使用する場合に通用する英語であるのかどうか、学生の英語を employability の観点から分析した研究は非常に少ない。本研究では実際に企業で英語を職務に使用しているビジネスパーソンに学生の英語の発話を 1) comprehensibility、accentedness、employability の指標で評価してもらい、各変数の相関関係を調べると共に、2) インタビューを通して企業が学生に期待する英語スピーキング能力を質的にも調査し、大学卒業時までに学生が身に着けておくことが望ましい employability の高い英語能力について明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

英語を話すことが求められる仕事に就く人々に焦点を当て、オンライン上のインタビューやインターネット上のデータ分析を通じて、実際の雇用現場で求められる実用的な英語スピーキング能力について調査した。

1) データ収集 ：日本人大学生が話す英語の Employability を調査するために、英語力の異なる学習者の発話を収録し、英語母語話者（母語話者レベル）に提示して employability についての主観評価を収集した。業務の種類・難易度によって求められる

英語のレベルは大きく異なるため、被験者には訛の程度の異なる 6 つの発話（疑似面接の応答の様子）を聞き、それぞれの発話者が①同僚や顧客とコミュニケーションをとる機会、②社会的ステータスの異なる 4 つの職業で雇用される可能性に関するアンケートに答えてもらった。最終年度では被験者の Language Background をより多様にし、Native English Speaker だけではなく、英語が母語ではない社会人からもデータをとれた。

2) データ分析：アンケート結果は、共分散分析（自由回答の部分は質的分析）を実施している。量的な統計処理に加えて、（データマイニング等の）質的分析も現在も実施中である。例えば被験者が発話者の employability（企業に雇用される可能性）について考慮する際、訛の強さや発話のわかりやすさだけでなく、発話者の「自信」や「誠実さ」を評価している傾向が見られた。音声学的な要素以外の要因が employability にどのような影響を与えているのか今後さらに分析していく。

3) 企業関係者へのヒアリング：企業関係者等に日本人大学生に求める英語力などに関するアンケートを実施した。

4. 研究成果

上記の「研究の方法」で収集されたデータの分析結果は、2023 年 3 月のシンガポールで実施された 57th RELC INTERNATIONAL CONFERENCE（国際学会）で「The effect of accented English of Japanese university students on employment decisions」として発表した（早稲田大学法学学術院・原田康成教授との共同発表）。コロナの影響で実験に遅れが生じ、分析が実施できなかった分もあったため、分析は進行中でこのデータに関する論文は現在執筆中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 原田 康也，坪田 康，鍋井理沙，赤塚 祐哉，森下美和	４．巻 Vol.37 P1-49
２．論文標題 自律的相互学習を支える『隣の学習者』と『ざわめき』 -- 相互扶助・共感・マスキング--	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本認知科学会第38回大会発表論文集	６．最初と最後の頁 328-335
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鍋井 理沙，原田 康也	４．巻 2021年度版
２．論文標題 日本人EFL学習者の Zoom Breakout Room に対する認識と評価	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語学習と教育言語学：2021 年度版 Language Learning and Educational Linguistics 2020-2021	６．最初と最後の頁 47-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yasunari HARDA, Lisa Nabei, Miwa MORISHITA	４．巻 -
２．論文標題 All those noises: online vs. face-to-face interactions for autonomous mutual learning	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Proceedings of the 56th RELC International Conference	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 原田 康也 赤塚 祐哉 坪田 康 鍋井理沙 森下美和	４．巻 Vol.37 P-42
２．論文標題 オンライン授業における学生間のインタラクション （相互作用）と全人的な交流機会の担保 Toward Online Class-Embedded Oral Interaction Exercises for Japanese Learners of English	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本認知科学会第37回大会発表論文集	６．最初と最後の頁 303-312
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鍋井理沙　森下美和　原田康也	４．巻 2018年度版
２．論文標題 英語学習者の文法理解と協同学習による気づき	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Language Learning and Educational Linguistics 2018-2019	６．最初と最後の頁 １－77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 原田 康也，坪田 康，鍋井理沙，赤塚 祐哉 ,森下美和
２．発表標題 自律的相互学習を支える『隣の学習者』と『ざわめき』 -- 相互扶助・共感・マスキング--
３．学会等名 日本認知科学会第38回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yasunari HARDA, Lisa Nabei. Miwa MORISHITA
２．発表標題 All those noises: online vs. face-to-face interactions for autonomous mutual learning
３．学会等名 56th RELC International Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 原田康也 坪田 康 赤塚祐哉 鍋井理沙 森下美和
２．発表標題 オンライン授業における学生間のインタラクション（相互作用）と全人的な交流機会の担保
３．学会等名 日本認知科学会第37回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 鍋井理沙
２．発表標題 Employability of Japanese University Students： How their Accented English Might Affect their Job Applications
３．学会等名 日本ビジネスコミュニケーション学会2019年度年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Lisa Nabei　Yasunari Harada
２．発表標題 Unstressed Elements in Listening Comprehension for Japanese Learners of English
３．学会等名 The 16th Asia TEFL, 1st MAAL & 6th HAAL 2018 International Conference University of Macau（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 鍋井理沙
２．発表標題 「企業が大学生に期待する英語力: Pilot Questionnaire for Needs Analysis」
３．学会等名 日本ビジネスコミュニケーション学会2018年度年次大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Lisa Nabei　Miwa Morishita　Yasunari Harada
２．発表標題 Differences between self-noticing and interactional noticing through dictogloss activities
３．学会等名 EuroSLA 28（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 原田康也 森下美和 鈴木 正紀 横森大輔　遠藤 智子　鍋井理沙
２．発表標題 自律的相互学習の記録と分析からインタラクションの楽しさへ～ 外国語としての英語自動処理の難しさを超えて ～
３．学会等名 電子情報通信学会　思考と言語研究会（TL）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Lisa Nabei
２．発表標題 The Effect of English with a Japanese accent on the Evaluation of Job Applicants
３．学会等名 New Sounds 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Lisa Nabei　Yasunari Harada
２．発表標題 The effect of accented English of Japanese university students on employment decisions
３．学会等名 57th RELC INTERNATIONAL CONFERENCE（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 鍋井理沙
２．発表標題 自己診断する学生
３．学会等名 第192回次世代大学教育研究会(NextEdu-192)
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	原田　康也 (HARADA YASUNARI) (80189711)	早稲田大学・法学学術院・教授 (32689)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関